気仙沼市小中学校の再編整備に関する中間報告

令和７年４月

気仙沼市小中学校再編検討委員会

目次

はじめに

Ⅰ　学校再編に関わる基本的事項
１　学校再編の必要性と進め方
（１）小・中学校再編準備会による基礎作業
（２）再編か統合か
（３）魅力化への願い
（４）審議の主ながれ
２　対話型の合意形成を目指して
（１） 新聞広告欄を活用した広報・ステークホルダーからの意見聴取
（２） 委員会内グループセッションから

Ⅱ　各諮問事項について
１　小学校及び中学校の再編の基本的な考え方
２　よりよい教育環境整備のための具体的な学校配置案
３　再編整備の具体的な方策
４　今次再編後の考え方
５　その他再編整備に向け必要となる事項

おわりに

Ⅲ　資料（再編検討委員会における活用資料等）
① 諮問書
② 少子化の現状・児童生徒数の推移
③ 学校規模によるメリット・デメリット
④ 教員配置数
⑤ 部活動数
⑥ 気仙沼市教育大綱概要版
⑦ 生徒数と学級数
⑧ 学校再編に向けた予定（改訂版）
⑨ ワークショップ・意見聴取の実施日時
⑩ 三陸新報広告欄を活用した広報・全６回分
⑪ 再編検討準備会の概要
⑫ 再編検討委員会の構成

はじめに

気仙沼が輝くまちとならなければ，東日本大震災からの復興は果たせない。2011 年の大震災発生から 15 年を迎えようとするなか，建物や道路などのハード面は復興してきたものの，新たな危機が復興に影を落としている。その危機とは子供数の劇的な減少である。2024（令和６）年度の市内中学校３年生（15 歳児）は 393 人であるが，０歳児は 185 人である。15 年前と比較した出生数の激減ぶりは衝撃的である。歳別にみた子供数は，資料②のとおりである。2015（平成 27）年度の出生数は，前年度と比べて 76 名もの減となった。さらに，2017（平成 29）年度には 66 名の減となり，2019（令和元）年度にも 40 名の減となっている。子供を産み育てやすい環境であるのか，子供たちに最善の公教育を提供しているのか，市民の様々な視点にたって，一つ一つ丁寧に，しかしながら，早急に対応策を講じていく必要がある。

上記中学校３年生 393 人の子供たちは，９校の中学校に通学している。しかし，９校のうち，２学級を編成することができ，中学校１年生から中学校３年生の間にクラス替えをすることができた学校は６校であった。３校は１学年１学級であり，クラス替えができない。これら単学級は，2028（令和 10）年度には４校になり，2031（令和 13）年度には５校，2035（令和 17）年度には８校になる（資料②）。

小学校からの９年間，20 数名の小集団で，互いを深く認め合い，性差や家庭環境の違いを超えて信頼関係を築きつつ，成長することも公教育の一つの在り方ではある。文部科学省から学校規模によるメリット・デメリットが示されたことがあり，一概に小規模学校の教育の質が劣るとはいえない（資料③）。さらには，ICT 等を活用しクラス編成を採らないなどの新たな学校を創造するという考えもありうる。しかしながら，現在の法規定に基づき，学校を運営していくには，学級という仕組みや指定されている定数に近づく必要がある。これまでのところ，日本の教育制度は，小学校，中学校ともに，12 学級～18 学級を標準として教員を配置し，教科指導，探究的な活動や特別活動など教科を横断する力を養う教育活動を行うことを基に展開されている。その上で小学校は，学級に応じた学級担任制，中学校では，教科対応の免許を必要とする教科担任制を採っている。

このことを中学校にあてはめ，もう少し詳しくみてみると，35～40 名で編成される１学級を標準に（国の制度改正により 2026 年度以降，40 名から 35 名に中学１年生から順次変更），１学年４～６学級の３学年分，すなわち 12～18 名の学級担任が，10 教科（国語，数学，理科，社会，英語，保健体育，音楽，美術，家庭・技術）のいずれかを担当し，１教科に複数の教員が存在することが標準として想定されていることになる。しかし，現在，気仙沼市内の中学校で１学年４学級は存在しない（資料⑦）。１教科１名の担当や，複数校を掛け持ちして担当することが常態化している。ただし，実際には，生徒数，特別な支援を要する教育活動，地域特性などについて，追加の措置や非常勤講師による補充が行われ，国語，数学，理科，社会，英語などの高校入試教科のいずれかにおいては，複数の教員が配置されるようにできるだけの工夫はされている。

とはいえ，１教科１名の担当では，教員に急な休職などの事態が発生したとき，またそれが高等学校の入試科目であった場合には，子供たちの学習保障に相当な混乱をもたらす危険性が高い。応急措置として，教頭が教科免許に応じた授業を担当することもあろうが，校務全体を支える仕事が減るわけではないので，過重負担になる。日本の教員の質の高さは国際社会でも認知されるところであるものの，指導力の向上は他の教員との切磋琢磨のなかで実現されていくものであり，１教科１名配置では，教員の指導力向上の停滞も招きやすい。

意欲と質の高い教職員集団であることも，まちの大きな魅力の一つである。教員が，このまちで働きたい，と強く思う労働・生活環境の改善も視野にいれていく必要がある。子供のウェルビーイング（個人的社会的幸福）と教師のウェルビーイングは一体的である。

様々な体育系や文化系の集団で技を磨く部活動についても憂慮すべき状態にある。大人たちが子供時代に体験してきたような活動や選択の機会を現在の子供たちに十分に提供することができていない。野球部が単独で成立しているのは１校のみで，６校は合同チームによる編成，２校には存在しない。バスケットボール部がある学校は６校，バレーボール（男子）は２校にしかない。吹奏楽部が存在するのも６校である（資料⑤）。現在，文部科学省からは部活動の地域移行が奨励され，地域社会が受け皿となるなど様々な取組が本市でも進みつつあるが，国からの財政補償が手厚いわけではない。身体能力や技能を集団の中で磨くことが，家庭の経済力に左右されるような事態はなんとしても防いでいきたい。

一方で，気仙沼市の教育には全国から高く評価されている点もある。ESD（持続可能な開発のための教育）・SDGs（ESD を発展させた，国際連合が提唱する，誰一人取り残さない持続可能な開発目標）を「海と生きる」として，幼稚園・保育所から高等学校まで，全市をあげて実践してきた。これらの推進が効果をあげている学校について，ユネスコが，ユネスコスクール加盟校として定期的な認可を与えており，本市の全小中学校が加盟・認定を受けている。国際的な価値を推進する教育活動が展開されてきたことは，本市の大きな財産である。加えて，５時間授業の日を全市の小学校４年から設定し，6 時間目にあたる時間は個別指導や教材研究を行うこととしたり，「教育パッケージ」と称し，ふるさと納税による増収分を重点的に学校教育費としたりするなど，新たな取組も精力的に進められてきた。小規模であることの良さを生かした小規模特認校制度も特筆すべき取組である。しかしながら，子供数の激減は，さらなる学校の魅力向上の必要性を示唆している。

上記の子供数激減を起点とする教育をめぐる危機について，気仙沼市小・中学校再編準備会が組織され，2023（令和５）年 11 月 29 日の第１回から３回にわたり，市長，教育長以下教育委員会事務局とともに，11 名の委員が，基礎的情報を共有しつつ意見交換を行った。同準備会では，市長から，単なる統合であっては市民の理解は得られない，理解を得るのは難しいからとこのまま子供数減が進むことを黙認し，何の対応もしないことは無責任だと考えた，との発言があった。市民それぞれにとって格別な思いのある小学校，中学校について大きな変化をもたらすことは，相当に勇気のいることである。再編の議論が，市民の協働を喚起し，このまちをより輝かせることになると信じ，11 名の委員は，小中学校の再編の必要性と要件について意見を交換した。各委員の主張は多様であり，小規模校の良さをもっと生かしていくことや義務教育学校化による魅力化などの意見もあった。しかしながら，教育長から再編について諮問が発せられることと再編において子供の意見を大事にする手法をとることについては合意された。職指定であった方を除き，全員が新年度に発足した，再編検討委員会の委員になることを承諾し，新たに様々な団体に属する方々を加え，20 名の委員から成る組織となった。こうして成立した本再編委員会は，2024（令和６）年６月５日開催の第１回から 2025（令和７）年３月 10 日開催の第７回まで審議を行った。その結果として，教育長からの諮問に関して中間報告を提示する。

2025（令和７）年４月 10 日　気仙沼市小中学校再編検討委員会　委員長　本図　愛実

Ⅰ　学校再編に関わる基本的事項

１　学校再編の必要性と進め方

（１） 小・中学校再編検討準備会による基礎作業

小・中学校再編検討準備会（以下，準備会）では，以下の点について意見交換を行った。

A　全国の潮流，本市の課題から，これからの本市の学校はどうあればよいか。魅力ある学校像とは？
B　整備計画（前計画）における課題から，政策決定のプロセスはどうあればよいか。
　B-1　住民の理解を促進する方法
　B-2　本市の魅力を考える，子供・若者会議の実施について
　B-3　本市の未来を考える，保護者会議の実施について
　B-4　決定までのプロセス
C　再編検討委員会における検討事項（基本的な考え方，具体的再編と時期等）
D　再編検討委員会の構成について（人数・選出区分，公募の有無）

A の議論に際し，全国の教育改革の状況，本市の現状と課題（学習環境，部活動など），気仙沼市義務教育環境整備計画（平成 24 年～平成 33 年度，10 年間３段階による実施）の課題について事務局からの情報提供を受けた。とくに，気仙沼市義務教育環境整備計画の課題としては，学校が残らない地域からの不満，学校将来像の共有が十分ではなかった，保護者からの意見聴取が不足していた，合意形成の在り方を再考するべきであるという，率直な振り返りが示された。

これらを基にした，準備会委員たちの意見は，
ア）学校再編は必要である（次項を参照）
イ）子供から意見を聞いてほしい（「２　対話型の合意形成を目指して」の項を参照）
ウ）気仙沼の伝統を大事にしてほしい
エ）地域との連携を大事にしてほしい
オ）子供を取り巻く環境を改善してほしい
カ）「気仙沼プラン」を構築しては
に集約できる（第２回準備会配布資料より）。これらのうち，ア）からオ）は，再編検討委員会の議論の土台となった。

（２） 再編か統合か

単なる統合ではなく，再編を目指すという点は，重要な論点である。準備会では，「統合ではなく，再編という組み直しに期待している」という発言もあった。統合という手法では，規模の大きいある学校に，規模の小さい学校を吸収する，という形になりがちであり，規模の小さい学校の関係者に不公平感をもたらす。さらに，規模にさほど差異がない場合ともなれば，なおのこと，不信感を招くことになる。準備会では，気仙沼市義務教育環境整備計画実施において課題となった点について，市全体の学校が新たな組み合わせとなり，ある学校だけではなく，市全体の教育力向上という視点をもつこと，上意下達の意思決定ではなく，当事者の意見を聞き，市民の合意

形成を目指すことなどを基本方針とすることが有効なのではないかと考えた。この点も再編検討委員会の審議の基本的姿勢となっている。

準備会の委員からは，再編ということであれば，歩いて通えることの教育的効果を重視し，小規模の学校としてすべて維持していくこと，あるいは，市内１・２校の義務教育学校（小学校から中学校までの９年間の教育課程を一体的に行う学校）を設置する，ということが実現できないか，という意見も述べられた。

前者については，この趣旨が小学校再編の在り方に生かされていくことになった。後者については，再編検討委員会においても，委員から意見があった。他地域での成功例もあり，魅力的な案である。しかし，数多くの空き校舎が発生するなかで，用地取得とその上での校舎建築に 10 年単位の時間を要することになり，現在の課題の早急な対応とは言えないという見解が事務局から示された。小中一体型の義務教育学校については，国が定める市の令和６年度の標準財政規模 190 億円の１／２に相当するような額が予想され，中長期の積み立てや債券の発行が必要ともなろう。再編検討委員会としては，それは今後のステージの議論としていただき，まずは現在の子供たちの学習環境整備の早急な改善に資源を投入してほしいと考える。

（３）魅力化への願い

吸収型の統合ではなく，全市の学校の在り方を考え，全体の向上を目指すのであれば，各学校をどのように魅力的な学校にしていくか，再編と魅力化を一体的に検討する必要がある。魅力化が成立しなければ，再編は成功しない。この点について，再編検討委員会では，子供，若者，保護者，市民からの意見を基にしつつ，グループセッションという形をとり，いろいろな意見を自由に交換できるようにして検討した。詳細については，「２　対話型の合意形成を目指して」で取り上げる。

（４）審議の主なながれ

以上の基本的認識の下，再編検討委員会では，教育長からの諮問事項５点について，以下のようなながれで審議を行った。

気仙沼市小中学校再編検討委員会への諮問事項（「諮問書」資料①）

１　小学校及び中学校の再編の基本的な考え方
２　よりよい教育環境整備のための具体的な学校配置案
３　再編整備の具体的な方策
４　今次再編後の考え方
５　その他再編整備に向け必要となる事項

〔第１回〕

○検討準備会からの申し送り事項を確認した。
○本市学校の現状と課題，教育における全国の潮流の把握を行った。
○今後の検討スケジュールを確認した。
○小中学生の意見聴取を開始することとした。

〔第２回〕

○三パターンから，「小学校は最小限の再編，中学校は数校への再編」とする B パターンを良として議論を進めることとした。

○若者，保護者，市民から，上記方針に対する意見聴取会を実施することとした。

〔第３回〕

○上記方針に基づく再編の基本的な考え方をまとめ，その際，再編に伴う学校の魅力化が重要であることを確認した。

〔第４回〕

○子供，若者，保護者，市民からの意見を共有した。

○事務局から再編による教育改善内容を説明した。

○委員長の求めにより，次回，事務局案（小学校は現行維持，中学校４校再編案）を検討することとした。

〔第５回〕

○事務局の中学校４校案について，市民の意見を踏まえて議論を深めるために，委員を少人数に分けグループセッションを開始した。

〔グループセッション〕

○委員３グループによる，各２回のグループセッションを実施する。

○テーマは，「中学校４校案に対する意見」，「学校のさらなる魅力化のために実施していくべきこと」，「その他の論点」とした。

〔第６回〕

○群馬県藤岡市における小中連携とコミュニティ・スクールについて，視察結果を報告した。委員２名が参加。

○グループセッションの結果を共有し，中学校４校案について検討し，事務局案で妥当とした。

○中間報告案を事務局から提示してもらい，グループセッションにより検討することとした。

〔第７回〕

○グループセッションの検討結果について，中間報告案にどのように反映されたか，確認した。

○委員から懸念事項をあげてもらい，中間報告案にそれらが伝わるように委員長が追記して最終版を作成し，メール審議により検討することとした。ただし，異論が多い場合などには，再度，会議をもつことに切り替えるという条件がついた。

２　対話型の合意形成を目指して

（１） 新聞広告欄を活用した広報・ステークホルダー（子供・保護者・地域・若者など）からの意見聴取

義務教育環境整備計画実施時に発生した課題の乗り越えを視野としつつ，再編の在り方について，対話型の合意形成を行っていきたいと考えた。委員会内に広報ワーキンググループを作り，三陸新報広告欄に審議結果をわかりやすくまとめ掲載することにした（資料⑩）。また，これらについて，市民からの意見を随時よせてもらうことを記事にも記載するとともに，教育委員会事務局ホームページ上でも意見募集について広報することにした。

以下のようなステークホルダーとともにワークショップ，意見聴取も行った。実施日時等は資料⑨の通りである。ステークホルダーとは，利害関係を有する当事者ということである。

A　小学生・中学生のワークショップ

新しい時代を生きる子供たちにとって最適な学校規模や配置などの検討にあたり，「自分もみんなも幸せだと感じる学校について考えよう」をテーマとし，小学生と中学生のワークショップを行った。

小学生は，市内全小学校の５・６年生を対象とし，685 名の児童が参加した。「こんな授業だといいな」「こんな学校行事にしたいな」「こんな学校生活だとやる気が出るな」の３つの観点から，意見を聞いた。

中学生は，市内全中学校の全校生徒を対象に，「学習・授業」「学校行事・部活動等の活動や生活」「小中高と続く学校生活」の３つの視点から，中学生が期待する学校について生徒の意見を聞く機会を設けた。参加した 848 名の生徒からグーグルフォームで意見をいただいた。

児童生徒の共通した考えとして以下のように整理できる。

① 児童生徒は，友達や先輩・後輩，先生，地域の方々など，他者との関わりをとても大切に考えている。また，市内外問わず，交流を通して新しい出会いにも期待している。できるだけ多くの人との関わりの中で磨き合い，他と意見交流ができる授業を望んでいる。

② 一方では少人数の良さも理解し，個を尊重している。自分のペースで勉強したり，選択したりできる学習も望んでいる。また，いじめや不登校等について心配し，学校には丁寧で親身に相談できる環境が必要だと考えている。

③ 学校生活では，行事等において，全校の児童生徒や他校の児童生徒など，多くの友達との交流や海洋や伝統芸能などの気仙沼らしい活動を望んでいる。また，何事においても自分たちで考え，計画し，主体的に取り組みたいと考えている。

④ 中学校においては，部活動は自分の興味関心のある種目や新しいことに挑戦したいという希望を持っている。また，中学生のうちにできるだけ多くの同級生との関わりを持つことが必要だと考えているとともに，今いる仲間と多くの思い出をつくりたいと考えている。

⑤ 児童生徒は，体育館や特別教室へのエアコン設置やトイレの改修など，きれいで整った設備の学校を望んでいる。中学生の中には，校則を時代に合ったものに見直す必要性を感じている生徒もいる。

B　高校生・若者のワークショップ

「気仙沼の小中学校の魅力をアップするためにはどうしたらよいか」をテーマとし，高校生と若者のワークショップを行った。

高校生 11 名（気仙沼高校３名，気仙沼向洋高校２名，本吉響高校３名，東陵高校３名），気仙沼市出身の大学生２名，社会人の若者３名が参加した。「魅力ある学校像」と「学校再編の考え方」の二部構成とし，個々の考えを自由に付箋紙に書き出し，グループ毎に模造紙に貼りながら話し合うとともに，グーグルフォームでも参加者から意見を募った。

高校生，若者の共通した考えとして以下のように整理できる。

① 他者との交流の重要性や，気仙沼らしい学びの充実，学校施設や市の施設設備の充実等，小中学生のワークショップでも挙げられた意見が多く出された。

② 高校卒業後の進路選択や自己のキャリアアップに関わる支援や環境の不足を気仙沼市の課題としてあげ，将来の進路や職業選択に関わる学びや体験を中学校から多く取り入れること，学習支援等の環境を充実させること，選択できる学校を求める声も目立った。

③ 自身の学校統合の経験から，人間関係の広がりや視野を広げる環境の必要性を感じている意見が多かった。

④ 再編検討委員会で検討した「小学校と中学校で考え方を分けて，小学校は最小限，中学校は数校に再編」の考え方への賛同意見がほとんどであった。

⑤ 小中学生や市民から意見等を聞き取ることの必要性についての意見が数名からあった。

C 保護者，地区住民からの意見聴取

未就学児・小中学校保護者からの意見聴取会を，市ＰＴＡ連合会の５ブロックで実施した。また，地区住民からの意見聴取会を市内 10 地区で実施した。

「小学校と中学校の再編の考え方を分けて小学校は最小限，中学校は数校に再編」とした再編の基本的な考え方，保護者・市民が考える「こんな学校を」について，意見を聞くとともに，保護者向けの説明動画を配信し，ウェブやグーグルフォームでも意見を募った。意見聴取会に保護者 54 名，地区住民 81 名が参加した他，ウェブ及びグーグルフォームには，合わせて 76 件の意見が寄せられた。

保護者からは，学校再編の考え方について，「小学校と中学校で考え方を分けて，小学校は最小限，中学校は数校に再編」の考え方への賛同が多数であった他，早期の再編や小学校の再編を望む声もあった。保護者が考える「こんな学校を」では，切磋琢磨し個性を尊重できる学校，子供が主体的になれる学校，他校，市外や国外との交流などの意見があった。

地区住民からは，学校再編の考え方について，地域と学校の関わりを重視する意見が根強く，「考え方」に賛同の意見がある一方で，再編に慎重な意見も多数あった。地区住民が考える「こんな学校を」では，学力の向上や教員数の確保の他，学校と地域の連携による行事の開催などがあった。

また，保護者・地区住民共に，学校の魅力として，教育活動に関する意見と併せて，通学環境や施設設備への要望が多く聞かれた。

（２） 委員会内グループセッションから

グループセッションは，委員をＡからＣの３グループに編成し，各グループ計３回行った。３回目の中間報告事務局案に対する意見を記載しておきたい。

Ａグループ

1「小学校及び中学校の再編の基本的な考え方」について

○これまでの検討どおり，現状の小学校をできるだけ維持し，中学校については４校の再編を進める。

2「よりよい教育環境整備のための具体的な学校配置案」について

○子供たちの通いやすさを考えることが大事であり，中学校４校案の組合せと場所について，道路，周辺環境，交通状況等の説明も必要である。また，将来１・２校になる可能性も考慮する必要がある。

○具体案が出たことによる市民からの意見が出てきており，地域の納得のうえで進めたい。

3(1)「再編の時期」について

○今後の検討事項や通学環境が変わることを考えると，令和９・10 年度の再編は周知する時間もない。理解を得られないままでの実施は混乱を招くことから，令和９年度を準備期間とし令和 10・11 年度の再編が適切であると考える。

3(2)「再編を契機とする学校の魅力化」について

○コミュニティ・スクールとの連携や協働教育など，再編された学校で実践できる環境が必要である。

○国際教育や海洋教育等の多様性のある学習の魅力も入れてはどうか。

○高校進学でも専門科に進む子供たちが増えており，中学校で様々な経験をさせることが大事である。

○中間報告であり今後も検討が続くことから，断言を避けた柔軟な記載にしてはどうか。

4今次再編後の考え方

○３区，４区（区分けはｐ12 参照）については，考えられる課題も記載し，市民の意見を聞く必要がある。

5その他 再編整備に向け必要となる事項

なし

Bグループ

1「小学校及び中学校の再編の基本的な考え方」について

○児童生徒数が減少する現状においても，再編によりさらに学校の魅力が増すように検討を進めてきたことを強く押し出したい。

2「より良い教育環境整備のための具体的な学校配置案」について

○学力の向上に向けて，中学校に専門的な教職員を配置していくためには中学校の集約化が必要であることを記載し，参考として教員定数の資料を付けたい。

○第２区に津波浸水想定の記載がないので，市民の憶測を呼ばないように記載しておく。

3(1)「再編の時期」について

○このままの時期で提案し市民の意見を伺う。

3(2)「再編を契機とする学校の魅力化」について

○「小学校の魅力改善」について，保護者との話し合いを複式学級のある学校に限定する必要はあるのか。

○「小学校の教育改善」には，地域の魅力の発信や小規模校の魅力についての記載がほしい。また，中間報告を経て答申までに小学校についても検討していくことを記載しておく。

○「学校と地域との連携促進」には，被災した市として，災害等に対する安全面への配慮の記載は必須。コミュニティ・スクールと連携した学校安全について記載がほしい。

○気仙沼市にしかない魅力はもっと打ち出せる。例えば国際化やスローフード。外国の方が安心できる多様性を受け入れる学校や，食育，フェンシング，地域産業や伝統芸能など，人口減少化時代のお手本となるような市の魅力が発信できないか。

4今次再編後の考え方

○小学校についても検討していくことの記載が必要。

5その他　再編整備に向け必要となる事項

上記の点で予定時間を超えたため話しあっていない。

Cグループ

1「小学校及び中学校の再編の基本的な考え方」について

○これまで協議を重ねてきたとおりとする。

2「よりよい教育環境整備のための具体的な学校配置案」について

○既存校舎を利用することから，衛生面，内観，外観を整備しないと市民から納得を得られない。

○子供たちの学習環境を考えると，できるだけプレハブ校舎には入れたくない。プレハブ校舎は学習室等の特別校舎とし，普通教室は既存校舎に置くべきである。

○第３区ではプレハブ校舎が必要となるが，面瀬中では普通教室までプレハブとなってしまう。松岩中であれば，プレハブは特別教室のみで対応できる。

3(1)「再編の時期」について

○唐桑小６年生は，小学校最後の年で統合を経験している。令和９年の再編では，また最終学年の中３に再編になることから，第１区の再編を令和 10 年にできないかとの意見が多くある。

○上記のことについて，子供の気持ちになると楽しみな期待や環境が変わる不安があると思う。唐桑地区の保護者との話合いの中で納得いただけるよう説明していく。

○令和９年度の再編には，遅くとも来年の２月議会提案が必要であると思うが，地域理解を得る

ことを考えると厳しいのではないか。

○子供たちの学習環境を考えると早期の再編が必要であり，市の施策として進めることも必要。

3(2)「再編を契機とする学校の魅力化」について

○再編により児童生徒数や教員数が増え，今までできなかったことができるようになることを示したい。

○再編を契機として，「こういう魅力が生まれます。」という表現にしてはどうか。

○気仙沼の学校の魅力を，他の市町にアピールできるものがあってもいい。

4今次再編後の考え方

○次の再編をしないと現状の４校再編案で考えられる魅力が無くなってしまう。また，小学校の再編をしっかりと考えなければならない。

○まちがどこを中心にコンパクトシティ化するのか見えない。学校はその中心となる。

○将来的にはどこかに学校を建てる計画を持つことも必要である。

5その他　再編整備に向け必要となる事項

なし

Ⅱ　各諮問事項について

１　小学校及び中学校の再編の基本的な考え方

再編検討委員会では，各委員から出された意見を踏まえて，次の３つの再編パターンについて協議を行った。小学校は最小限の再編，中学校は数校に再編する，パターンＢを中心に検討を進めることとした。

○　パターンＡ　　小学校，中学校ともに，数校に再編

○　パターンＢ　　小学校，中学校で再編の考え方を分ける
　　小学校は地域とのかかわりを重視して最小限の再編
　　中学校は発達段階や教育内容の高度化を受け，数校に再編

○　パターンＣ　　小学校，中学校ともに現状を維持

その結果，Ｉで示したような検討から，次の４点を基本的考え方とする。

【基本的考え方１】

小学校については，令和 12 年度までは小規模化は進むものの，新たに複式学級となる学校がないことから，小学生の発達段階や地域が学習フィールドとして機能してきたことを重視し，現在の学校を維持する。ただし，小規模特認校の成果や一方で複式学級となっている小学校があることなどを踏まえ，引き続き小学校全校について望ましい在り方を探っていく。

【基本的考え方２】

中学校については，社会性の涵養や主体的な学びの段階的な拡大の観点から早期の再編が必要であると判断し，校舎の状況や通学距離，さらに災害ハザード等を勘案して，４校への再編を提案する。

【基本的考え方３】

気仙沼市教育大綱の基本方針の一つである「まち全体で子供を育む環境づくり」を発展させ，「まちは一つのキャンパス」として，今回の再編により，全市全地域の教育力向上を目指す。

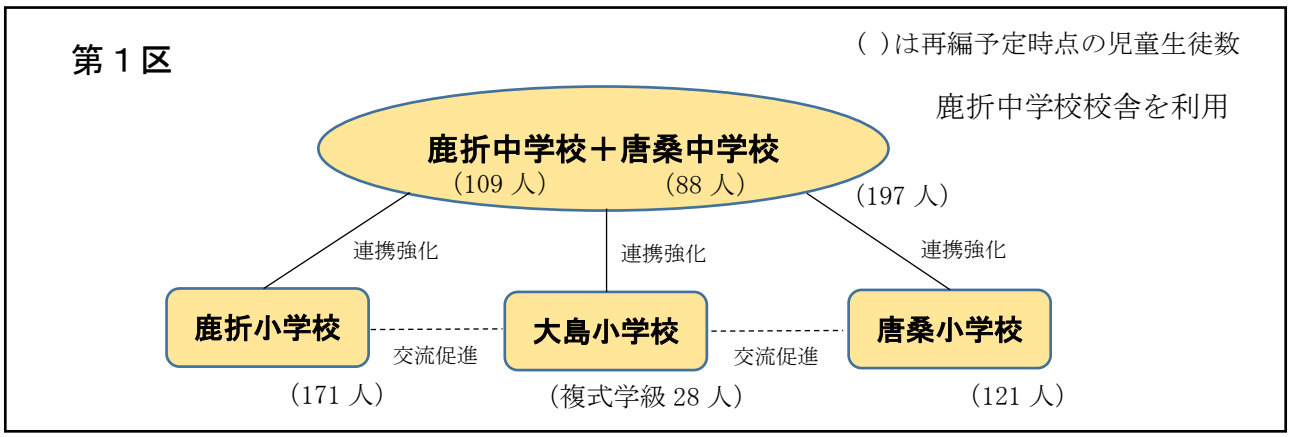
【基本的考え方４】

再編と各学校の魅力化向上は一体的であり，魅力化について，コミュニティ・スクールの設置義務となっている学校運営協議会を通して，子供，保護者，多様な市民との協働により実現していく。学校運営協議会の仕組を活かした市民参画を目指す。

２　よりよい教育環境整備のための具体的な学校配置案

教育環境の整備にあたり，全ての教科で専門教員による学習指導を行うためには一定の学級数を確保できる中学校の集約化が必要である。中学校４校の学校配置を次のとおりとする。

以下には，主に勘案することとした４観点（①学校間距離の比較，②各校における最遠住居地までの距離の比較，③再編予定時点で必要となる教室数と既存校舎の活用，④生徒の安全を重視し，各種災害ハザードとの位置関係）を合わせて示す。

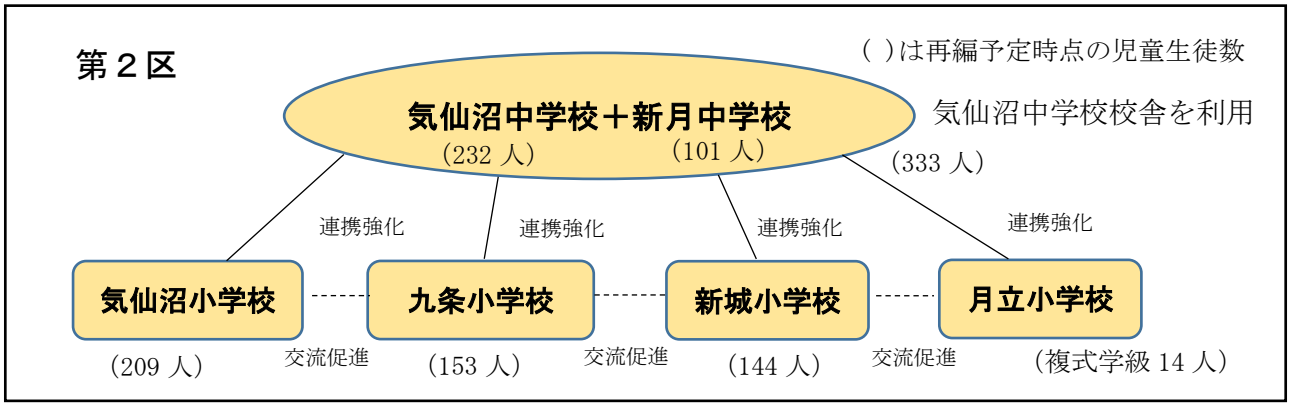


①　鹿折中：～鹿折小 1.1km，～大島小 9.1km，　～唐桑小 8.0km
　　唐桑中：～鹿折小 9.6km，～大島小 16.9km，～唐桑小 1.6km

②　鹿折中：～竜舞（大島南）12.0km，～白山（鹿折北）9.8km，～御崎神社（唐桑南）15.7km
　　唐桑中：～竜舞（大島南）21.7km，～白山（鹿折北）19.5km　が特に通学距離が長くなる。

③　一般学級７室，特別支援室２室（見込），ほか学習室等４室の計 13 室程度の教室が必要となるが，鹿折中学校校舎（普通教室 13 室）はそれを満たし，唐桑中学校校舎（普通教室 11 室）では教室数が不足する。〔※教室数は改修整備等の上での見込数〕

④　最大クラスの津波浸水想定，想定最大規模降雨による洪水浸水想定等から，両校とも浸水想定区域外に位置しており，特筆すべき差異はない。

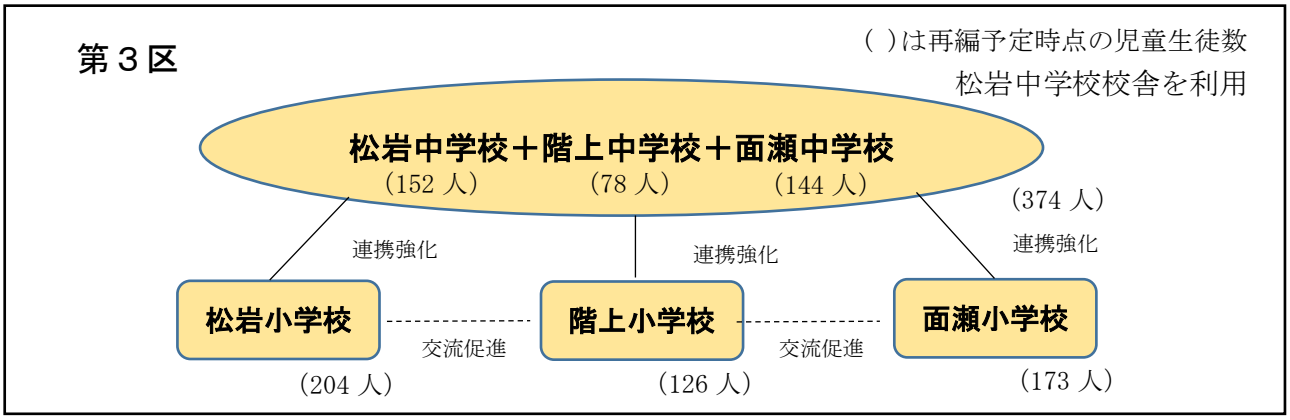


① 気仙沼中：～気仙沼小 0.2km，～九条小 2.1km，～新城小 3.5km，～月立小 9.0km
新 月 中：～気仙沼小 3.0km，～九条小 3.2km，～新城小 1.2km，～月立小 6.9km

② 両校間が約 3km と近く距離的に大きな差は生じない。通学距離としては
気仙沼中：～月立(新月北) 13.5km，～落合(新月南西) 13.2km
新 月 中：～月立(新月北) 12.2km，～落合(新月南西) 11.0km となる。

③ 一般学級 11 室，特別支援室３室（見込），ほか学習室等５室の計 19 室程度の教室が必要となるが，気仙沼中学校校舎（普通教室 19 室）はそれを満たし，新月中学校校舎（普通教室９室）では教室数が大きく不足する。〔※教室数は改修整備等の上での見込数〕

④ 最大クラスの津波浸水想定，想定最大規模降雨による洪水浸水想定，土砂災害警戒区域等から，新月中学校では敷地の周囲が洪水浸水想定区域とされており，一方で気仙沼中学校では周囲のまちが津波浸水想定区域とされているが，学校自体は浸水区域から離れており，また，体育館新築に伴う西校舎の解体により，土砂災害の危険はほぼなくなることから安全性については同校が高いと判断する。

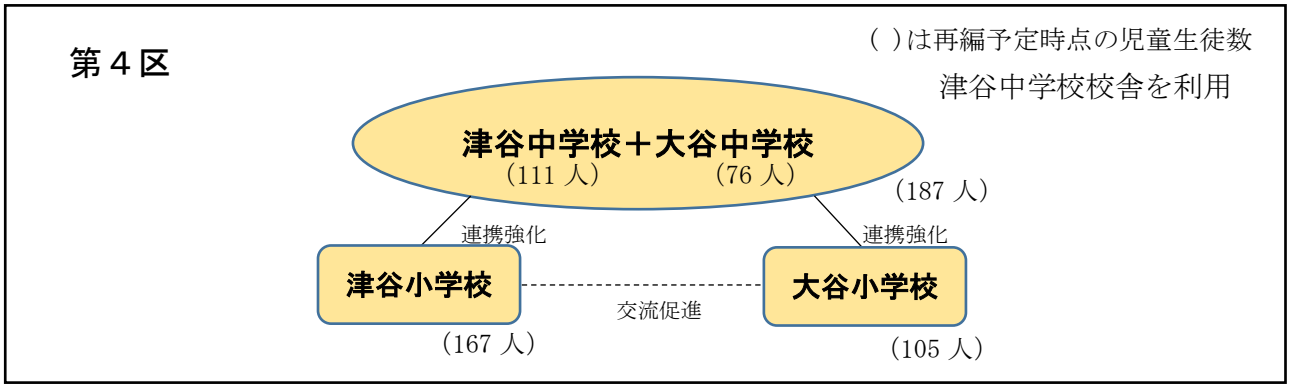


① 松岩中：～松岩小 1.3km，～面瀬小 2.7km，～階上小 5.5km
面瀬中：～松岩小 2.0km，～面瀬小 0.6km，～階上小 3.0km
階上中：～松岩小 5.2km，～面瀬小 3.9km，～階上小 0.7km

② 松岩中：～羽田神社(松岩西) 8.8km，～岩井崎(階上南) 8.7km
面瀬中：～羽田神社(松岩西) 9.0km，～岩井崎(階上南) 6.5km
階上中：～羽田神社(松岩西)15.2km， と階上中では他学区が遠距離となる.

③ 一般学級 13 室，特別支援室３室（見込），ほか学習室等５室の計 21 室程度の教室が必要となるが，既存校舎の調整では階上中学校（普通教室 10 室），面瀬中学校（普通教室 11 室）では大きく不足し，松岩中学校（普通教室 17 室）が最も教室を確保でき，仮設校舎を設置する際にも現行の運動場への影響が少なく，かつ，仮設校舎は特別教室の利用のみにとどめられる。〔※教室数は改修整備等の上での見込数〕

④ 最大クラスの津波浸水想定，想定最大規模降雨による洪水浸水想定等からは，３校ともいずれも浸水区域外に位置しており，特筆すべき差異はない。



① 津谷中：～津谷小 1.2km，～大谷小 7.5km
大谷中：～津谷小 6.9km，～大谷小 0.1km

② 津谷中：～鹿の子(馬籠) 8.5km，～蔵内(小泉南) 8.5km，～菖蒲沢(大谷北) 12.0km
大谷中：～鹿の子(馬籠) 16.4km，～蔵内(小泉南) 11.7km，～菖蒲沢(大谷北) 4.6km
と大谷中では特に馬籠地区が遠距離となる。

③ 一般学級６室，特別支援室２室（見込），ほか学習室等４室の計 12 室程度の確保が必要となるが，津谷中学校校舎（普通教室 13 室）はそれを満たすが，大谷中学校（普通教室 10 室）では教室数が不足する。〔※教室数は改修整備等の上での見込数〕

④ 最大クラスの津波浸水想定，想定最大規模降雨による洪水浸水想定等から，津谷中学校は，いずれの浸水想定区域からも外れており安全性がより高いと判断する。

３ 再編整備の具体的な方策

（１）再編の時期について

生徒数の急激な減少による今次の学校再編は，早急な実現が求められる。再編目標時期は，第１区及び第４区を令和９年度，第２区及び第３区を令和 10 年度を目途とする。令和９年度実施のながれについては資料⑧のとおりである。なお，再編校同士の交流等の子供の準備状況に十分配慮すること。

（２）再編を契機とする学校の魅力化について

再編検討委員会が重要事項として捉え検討してきた学校の魅力化の項目を以下のとおり整理した。今後も更に継続して協議する。これらの具体的な在り方については，コミュニティ・スクールとしての学校運営協議会とともに検討されたい。

① 子供主体の授業づくりの加速

子供同士が考え伝え合う学習活動による主体的な学びをより一層充実させるとともに，気仙沼市の教育の特色である ESD・SDGs 及び探究学習をさらに推進していくこと。そのためにも，教員配置の充実を図ること。

② 子供の自主性や自律性を生かした教育活動の推進

学校行事や学校間交流などの企画，学校のルール・環境の見直しなどに，子供が主体的に関わる機会の充実を図ること。中学校においてジャージでの登校や制服は用いないなど，中学生としての身なりについて，子供たちが自律的に考え選択できるように検討すること。

③ 小学校の教育改善

現状維持の方針の中でも，保護者との話合いが必要であること。地域と連携した教育活動の魅力発信，学校の選択肢として小規模特認校の理解を促進すること。子供からの要望

（例えば，おやつタイム）に応える施策を推進すること。（自治体においては朝食を抜く子供のために朝食を提供する学校もある）

④　中学校の新たな教育課程，部活動面の改善

再編する中学校は，新しい教育課程を創っていく姿勢を持つこと。平日の部活動の種目の充実や休日の部活動の地域展開を拡大すること。

⑤　小中連携教育の推進

学校間の児童生徒間交流，教員間の交流（専科教員，交流，合同研修等）を推進すること。４校それぞれが地域特性を生かしつつも，「まちは一つのキャンパス」として，全市の教育資源を共有し，固定観念にとらわれない学校づくりや魅力化を進めること。

⑥　不登校や特別支援教育への対応改善

個に応じた学びと子供同士の関わり合いが自然に生まれる環境をつくるために，校内教育支援センターの設置や，再編により通学距離が遠くなる中学生の居場所を母校の小学校等に確保すること。子供の声に応じた生徒指導を推進すること。

⑦　子供の立場から考える魅力的な教育の推進

放課後の活動においては，スクールバスが４つの中学校や大川さくら総合公園や市内の文化施設などを巡回しながら，好きな運動種目や文化的な活動に取り組むなど，子供たちの交流が生まれる環境づくりや子供たちのやりたいことができるような環境づくりをしていくこと。

国際教育や海洋教育等，気仙沼市の教育の魅力をより発展させ発信すること。

⑧　教員配置の充実

再編による教員配置の充実により，教員の働き方改革をより一層促進するとともに，子供の学ぶ意欲をさらに高めること。

⑨　校舎等の施設改善

再編校への集中的な校舎等の施設改善及び温水洗浄便座化を含む洋式トイレの整備，特別教室へのエアコン設置，周辺の渋滞防止対策を図ること。

⑩　通学環境の確保

スクールバスと徒歩通学による体力向上とのバランスを確保すること。学校周辺の道路事情，学校行事の土日開催や市主催行事の見直しなどにより，子供の安全面とともに通学時の混雑の緩和を図ること。スクールバスの柔軟な活用を図ること。引き続き，学区越境通学について条件緩和を図ること。

⑪　学校と地域との協働

コミュニティ・スクールが核となり，地域が学校を盛り上げようとする意識をもてるようにするとともに，災害等に対する学校安全について連携を図ること。小学校学区内だけでなく，中学校学区としての地域連携を充実させ，子供と大人が共に学び合う場をつくること。

⑫　学校跡施設の活用検討

跡施設を不登校特例校等子供支援の施設やNPO団体などが主催する活動の場に活用すること。

⑬　進捗状況の管理

学校の魅力化について継続的に充実を図り，点検や改善を進め，それらについて公表す

ること。

４　今次再編後の考え方

今回の学校再編は，社会の変化に合わせ教育のあり方を柔軟に考える必要があることから，令和５年度までの出生数から児童生徒数を見通すことが可能な令和 12 年度までの小学校，令和 18 年度までの中学校の状況分析に基づき，当面の課題解決と学校魅力化を図るものである。

今次計画実施後にも，小学校においては出生数を注視しつつ，学校再編を検討する必要がある。また，中学校については，令和 17 年度には第４区ですべての学年が単学級となり，その後は第１区でも学年単学級が見られることから，１～２校へのさらなる再編を視野に入れなければならない。その際には学校の位置を含めた校舎の在り方を検討する必要がある。

学校魅力化の推進とともに，これらの議論に今後とも市民が積極的に関わり，問い合わせ等が気軽にできるように，学校再編推進室や再編推進担当など，市民に分かりやすい，室や窓口の設置も市役所内に設置すること。

５　その他再編整備に向け必要となる事項

検討の中では，中学校４校の制服を統一し，スカーフやネクタイで区別することによりワンキャンパス的な考え方の機運醸成に繋がるといった意見もあった。また，教育委員会ではスクールバス，公共交通，徒歩など多様な通学手段を考えているが，市として遠距離通学者へのスクールバス等の通学支援の実施やトイレ改修等の施設整備も示された。

新たな中学校４校のコミュニティ・スクールを整備する必要がある。「まちは一つのキャンパス」を形としても示すように，学校運営協議会とともに市民参画・協働による議論が望まれる。

おわりに

本中間報告は，教育長への諮問に対する回答である答申の骨子ということになる。今後，子供たち，保護者，教職員，市民の意見を聞き，修正を加える。とくに，基本的考えとしてまとめた点について，気仙沼市民が協働して，輝くまちをつくっていくことができるのか，ご意見をいただきたい。委員のなかでは，令和９年度までの第１・４区の再編は時間的に難しいのではないかという意見もあった。できるだけ早く，最善の教育環境を現在の子供たちに提供し，学力や非認知能力（意欲や前向きさなどテストで測れない能力全般）についても，十分な育成が図られる状態となることを期待したい。